

『栄花物語』における為平親王像

—その叙述の特色—

川 田 康 幸

一、序

本論では『栄花物語』の中に記された、村上天皇の四宮・一品式部卿為平親王像の叙述の特色について考察を加えた。為平親王については、安和の変に言及した山中裕氏の論文に詳しい。^{註一}氏は為平親王の立太子をはばんだ原因は、高明の女と為平親王が結婚したことにありとみている。為平親王が立太子をすれば、藤原氏の人々が「上昇しつつある藤原氏の勢力が、再び源氏に奪われてしまうことを恐れたことは当然である」と心配した点にあるとみている。そしてその底流には、小野宮流の実頼と、九条流の師輔の一族の対立があったという。この実頼と手を組んだのが師尹である。山口博氏も、ほぼ同様な考えを述べている。^{註一}為平親王の立太子を阻止し、併せて左大臣源高明を排斥したのが安和の変であろう。安和の変の原因を論ずれば、為平親王の置かれていた立場を少なからず論じなければならないのである。本論ではこの強烈な印象を与える安和の変にとらわれず、『栄花物語』の語るところの為平親王に関する、叙述内容の検討に主眼を置きたい。

為平親王は天曆六年（九五二）に誕生し、^{註三}十四歳の康保二年（九六五）八月二十七日に元服し、三品に叙された。^{註四}五

十九歳となった寛弘七年（一〇一〇）十月十日に出家、同年十一月七日にその生涯を閉じている。^{註五}

『栄花物語』の中で、為平親王について言及する箇所は、松村博司氏が分けた^{註六}節の数を基準にして数えると、二十ヶ所の多きに亘っている。また『栄花物語』全四十巻の内、巻一「月の宴」から、巻三十九「布引の滝」までという、ほぼ全巻に亘って広く語られているのである。だがその中心は巻一「月の宴」である。巻一「月の宴」では十三ヶ所、全体の六十五パーセントの数（箇所）を占めている。ここでは他の巻には無いくらいの質・量ともに、非常に沢山のスペースを割いて、為平親王に関する叙述がなされている。それに比べると、残余の巻二「花山たづぬる中納言」や巻三「さまたまのよろこび」、巻十一「つばみ花」、巻十四「あさみどり」、巻二十四「わかばえ」、あるいは巻三十九「布引の滝」の諸巻では、質・量ともに貧弱である。巻二以下の諸巻では為平親王が叙述内容の中心を占めてはいない。ここでは為平親王の子孫を語る場面で、その祖が一品式部卿であったと遡及するにすぎないのである。巻二以降ではその各節で叙述される人物の血筋の良さ、非常に高貴な家の出であると語る場合に、引き合いに出されるのである。

『栄花物語』の為平親王関連の記述は、巻一にある。ここでは、村上天皇、安子、師輔等が深く慈しみ育て、将来の立太子をと考えられていたのが為平親王である。その将来の栄光が約束されていた為平親王は、周囲の祝福を受け源高明の女と結婚する。だがその後、外祖父・師輔、そして母・中宮安子、続いて父・村上天皇を亡くし悲嘆にくれる。追い打ちをかける如く、次の皇太子は為平親王ではなく、その同母弟の守平親王に決定。その最後の仕上げが安和の変、源高明の左降という順で展開されている。そこには将来の約束された若き親王が祝福された結婚をする。だが栄光の人生は結婚まで。その後は次々と後見を失って、ついには失意の人となった、悲劇の人生が非常に効果的に語られているのである。

そこで本論では、この為平親王を主人公とした貴人の悲劇が、『栄花物語』の中で、どのように造型され、構成され

ていったのかを検討したい。そしてその叙述の特色を明らかにしてみたい。

『栄花物語』での特色を検討する前に、まず為平親王の生い立ちから身てゆきたい。

二、村上天皇の掌中の珠

為平親王は先述した如く、天曆六年（九五二）に誕生している。父帝・村上天皇は即位して七年目、二十七歳。母・安子にとつては承子内親王、憲平親王に次ぐ三番目の子であった。兄・憲平親王はその二年前、天曆四年（九五〇）五月二十四日に丹後守藤原遠規宅で誕生している。二ヶ月後の七月十五日には親王、同二十三日には外祖父・右大臣師輔第において、早々と立太子の儀が執り行われた。^{註七} 襁褓に包まれた状態であつたろう。誠に脆弱な、いたいけない様子であつたろうと推定される。だが憲平親王立太子の喜びの消えぬうちに、翌天曆五年（九五二）七月二五日に、姉一宮の承子内親王が天逝する。^{註八} 幼き東宮・憲平親王の上に暗雲がただよつたのである。東宮の成育に両親や、とりわけ外祖父・師輔の不安はいかばかり募つたかと推測される。

そのような折りの二人目の男皇子の誕生である。両親や師輔の喜びは単なる二人目の誕生を喜ぶ以上の、一入深く強く胸を打つ感動を伴つた喜びであつたろうと思われる。この様な周囲の喜びに満ちた、待ちに待つた二人目の男皇子の誕生ではあつたが、為平親王の親王宣下や著袴の儀の執行された年月日等は不明である。兄弟の例を参考にすれば、誕生した天曆六年の内に（誕生が年末に近ければ翌年も考えられるが）、早々に行われたであろう。また三歳になつた年には著袴の儀が執り行われたと思われる。また親王家の別当には、師輔の子息が任命されたと思われる。

『九曆』の天徳三年（九五九）十一月二十六日の記事に、

（藤原安子）（養子内親王）

后腹男女親王別當宣旨事、別當者以

（守平親王）

と、資子内親王や守平親王家の別当に、外祖父・師輔の子息が任命されている。為平親王家の別当等についての子細は不明であるが、師輔の多勢の子息達の内でも、安子と同腹である伊尹、兼通、兼家、忠君註九の中の一人ではなかったか。

為平親王は、東宮・憲平親王の若し万一の時があった場合、直ちに次の東宮に立つ可能性の一番高かった人物である。安子腹の長姉・承子内親王は四歳で夭逝している。また村上天皇の兄・保明親王は、二十一歳の若さで即位することもなく、東宮の地位のままて病没している。註十 また東宮・保明親王の病没を受けて立太子した保明親王の息・慶頼王も、即位の日を迎えることも無く、五歳で夭逝しているのである。註十一 系図一参照

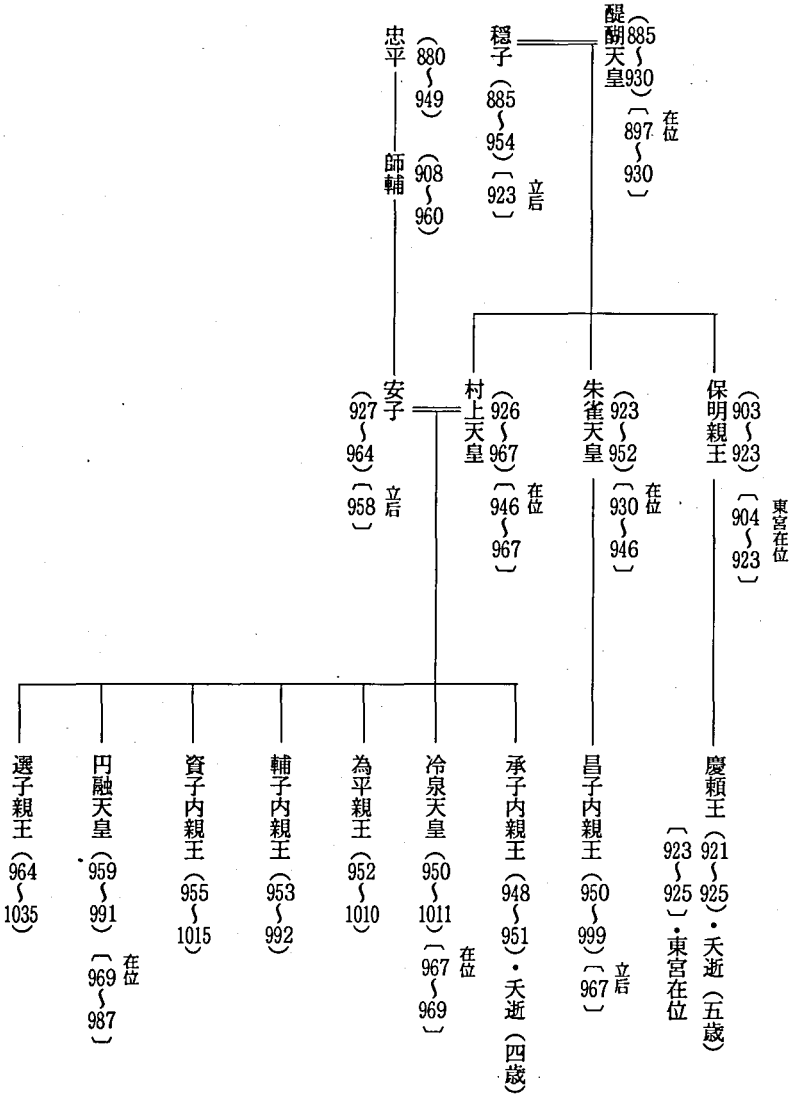
醍醐天皇の皇太子が三年の間に二人も亡くなったのは、わずか三十年ばかり前の事件であった。当時の人々にとっては記憶に生々しい、怖しくもあった出来事であった。師輔にとっては、いくら嚴重に為平親王を守護しても、し過ぎることはなかったのである。為平親王家の別当には、このような状況を考え合わせると、安子と同腹の子息の一人が任命されたと考えの方が合理的であろう。そして実際の差配は師輔その人が振っていたのではないか。為平親王の後見には、東宮の外祖父で右大臣でもある師輔が厳然と控え、目を光らせていたのである。ただし、為平親王の誕生から、立親王、別当の任命、著袴の儀といった、幼少期に言及した記事は見当たらない。『日本紀略』等はこの辺の記録が抜け落ちているのである。

天徳四年（九六〇）三月十九日に、為平親王は初めて御註孝經の手解を、右中弁菅原文時より受けている。この日の『日本紀略』の記事は注目される。それは、

今日、第四爲平親王於飛香舍初受御註孝經於右中弁菅原文時。有詩宴。

と、為平親王の読書始めが行われた殿舎が飛香舍・藤壺であったと記されている点である。飛香舍は当時母後の御所であった。註十二 外祖父・師輔の庇護のもと、順風満帆な幸せな為平親王であった。だが同年五月四日に、外祖父の「一くるしき二」と言われた右大臣師輔が、五十三歳の働き盛りで薨去してしまう。註十三 為平親王にとっては一番心強い後盾を失った

〔系圖 I〕



のである。

応和四年（九六四）正月二日には、為平親王は東宮・憲平親王と共に、父・村上天皇に拝謁し劔を賜っている。註十四 その一ヶ月後の二月五日には、外祖父師輔の同腹の弟・中納言師氏以下多くの陪従を従えて、北野において子の日の遊びが盛大に催された。『日本紀略』に、

第四爲平親王自禁中出北野。有子日之興。中納言師氏以下多以陪従。供鷹犬等。

と記されており、中納言以下の人々を従えた得意顔の為平親王が思い浮かばないだろうか。子の日遊びを設定し、中納言以下の陪従を従えるという、為平親王の面目躍如たる機会を設定したのは、当然、父・村上天皇であり、母・安子であつたらう。この為平親王の「子の日の遊び」は『栄花物語』や、『大鏡』の「師輔伝」に詳しく記されているのをもみても、華やかで多くの人々の耳目をひくものであつたと思われる。

帝よりの劔の下賜、多くの公卿・殿上人を従えた「子の日の遊び」。これ等は為平親王に対する村上天皇と中宮安子の、強く深い愛情・恩寵を世間の人々に示したことになるのではないか。世間の耳目を集めた「子の日の遊び」の華やかさを見聞した人々は、そこに文帝と母後の強い意向を感じずにはいられなかつたのではないか。父母の強い意志があつたればこそこの「子の日の遊び」が盛会なのである。だが、この様な面目を施す機会に恵まれた為平親王の身の上に、暗くて重苦しい不幸が襲いかかるのである。それは母・中宮安子の崩御という形をとつて、註十五突然に現出したのである。妹・選子内親王の誕生という、祝福すべき機会が、同時に母の命を奪ってしまったのである。

中宮・安子の崩御とは何を意味するか。為平親王や村上天皇の衝撃の大きさは言を俟たない。それと同時に安子の兄弟・九条流の人々のショックの大きさも如何ばかりか。あるいは母を亡くした為平親王より、九条流の人々のショック・混乱の方が大きかつたかもしれない。為平親王にとつては藤原氏、特に母を通じての九条流の人々との、大切な紐帯が

雲散霧消してしまったと言える。中宮の存在があったからこそ、九条流の師輔の子息達の栄達が保証されていたのである。中宮が亡くなれば、彼らは小野宮流の、時の太政大臣であった実頼や、小一条流の村上天皇の女御・芳子の父、右大臣師尹といった、同族内の他流の人々との間に生ずる軋轢に、直接抗してゆかねばならなくなったのではないか。九条流の伊尹や兼通あるいは兼家にとつて、東宮・憲平親王を守り立ててゆくのに、精力の大半を注ぐ必要が生じた。為平親王に対して従前割いていた精力が、半減せざるを得ない状況になったとも考えられる。

外祖父と母后を失った為平親王にとつて、無条件で頼れるのは、今や村上天皇のみになったと言つても過言ではない。このことは、父帝が一番よく認識していたとも推測できる。こうした為平親王の将来を憂へ心配した父帝の配慮である。母后の死によつて藤原氏との太い紐帯に、翳りの出だした為平親王に対して、翌年の康保二年（九六五）の正月二十九日に、父の恩寵によるものであらう、巡給とは異なる毎年預ることのできる、別給を賜ふこととなった。『除目大成抄』に、

无品爲平親王

右右大臣宣、奉勅、件親王宜毎年別給諸國目壹人、史生壹人者、

康保二年正月二十九日 大外記兼主税權助備後權介御船宿禰伝説奉

毎年、諸国の目一人と史生一人分の、別給を賜ふことが記されている。

親王に賜る給は「巡年に当たつた年に給せられるのであつて、毎年、賜るものではなかつた」^{註十六}のである。この康保二年の別給は、為平親王に対する特別待遇、殊遇と言える。父帝の為平親王に対する「ふりがたき」思いが充分にうかがえるのではないか。

父帝の為平親王に対する経済的な厚い配慮のもと、同年八月二十七日に、十四歳になつていた為平親王は元服する。

そして三品に叙された。

爲平親王加三元服。敍三品。加冠大納言高明。理髮藏人頭延光朝臣。親王以下參入。輔子内親王始笄。

(日本紀略)
同日条

加冠の大役は村上天皇の異母兄・醍醐源氏の源高明が勤め、理髮は同じく醍醐源氏の源延光が勤めている。このことは注目に価する。『公卿補任』の康保二年の条によれば、右大臣の席が欠けており、大納言源高明は、左大臣藤原実頼の席次に次ぐ、公卿では次席という高い地位にいた。だが左大臣は加冠の役には就かなかつた。公卿席次でいえば次席の、村上天皇の異母兄・醍醐源氏の重鎮が加冠の役を勤めたのである。理髮の役にも同じく醍醐源氏・村上天皇の甥があてられた。

兄の東宮憲平親王の場合は、憲平親王が既に東宮になっていた点もあり、加冠は左大臣藤原実頼、理髮は参議藤原朝忠註十七であった。弟の円融天皇の場合は在位中のことでもあり、加冠は摂政太政大臣伊尹が、理髮は左大臣源兼明が奉仕している。註十八兄と弟が元服した時点は、兄が村上天皇の皇太子であり、弟は天皇在位中であつたので、一概に比較して論ずるのも如何かと思われるが、爲平親王の元服には藤原氏の公卿・殿上人が一人も加わっていない。このことは、村上天皇が爲平親王の将来を、醍醐源氏に託さざるを得なかつた状況に置かれていたのではないか。故母・中宮安子の兄弟に託せない何かがあつたのではないかとも思わせる。糟糠の妻・安子を亡くし、気力の衰えた村上天皇を尻目に、藤原氏の内訌・暗闘が激しさを加えていたとも考えられる。とすれば火中の栗になりかねない爲平親王の元服に、わざわざ口をはさむ余裕が、藤原氏の九条流の若い人々に無かつたのかも知れない。

外祖父師輔、母安子は既に亡き人である。伯父伊尹は参議の席にはいたが、康保二年(九六五)の席次は、下から三番目という状況である。小野宮流の実頼は左大臣、小一条流の師尹は大納言、九条流の長兄伊尹は参議でしかなかつた。

為平親王の外戚には、はかばかしい藤原氏の実力者がいなかったのである。理髪を勤めた源延光の姉妹は、一人は九条流の師輔の長男・伊尹の室である。いま一人は小野宮流の実頼の二男・頼忠の室である。あとの一人の延光の妹・莊子女王は麗景殿の女御と呼ばれ、村上天皇との間に具平親王を儲けていた。村上天皇朝の末期の、九条流と小野宮流の微妙なバランスを、村上天皇は同族の延光にとらせたとも考えられるのである。系図Ⅱ参照

為平親王は八月に元服をし三品に叙された後、その年の師走頃に上野大守に補されたと思われる。註千この上野大守に任ぜられたことは、為平親王の経済的基盤を益々強固に確固たるものにしたようにとした、父・村上天皇の強い意志がうかがえるのである。また、この上野大守には以前、立太子以前の村上天皇がまだ若かりし頃（藤原安子と結婚して三年目に当る）に任ぜられた。村上天皇にとっては思い出深いものが上野大守であった。村上天皇は若かりし頃の自分に、為平親王を重ね合わせ、かつまた亡き中宮安子との記憶を新たにしたいとも解せるのである。

村上天皇が上野大守に任ぜられたのは、十七歳の天慶五年（九四二）十二月二十三日のことである。註二十一そして天慶七年（九四四）四月二十二日に皇太子に補されたのである。註二十二村上天皇にとっての、上野大守とは、皇太子に剛立される以前に任ぜられた幸先のよい、縁起のよい地位であった。それは又、為平親王の母との若かりし頃の自分自身を、思い出させるものでもあった。その上野大守に為平親王を任命したのである。

この様にみてくると、父・村上天皇の深い愛情のもと、康保二年の為平親王の身上には、

- (1) 毎年の親王給（別給）に預かるという、破格の待遇を受ける。
- (2) 元服し三品に叙される。
- (3) 上野大守（父ゆかりの地位）に補される。

という、特別待遇を受け、三品の位と共に、生活基盤を確固たるものとする経済的保障を与えられたのである。

翌康保三年（九六六）十一月二十五日に、為平親王は右大臣源高明の女と結婚する。この結婚は非常に特異な形式をとった。それは当時の一般的な婿入り婚とい註十三う形式を取らず、嫁を迎えるという形式をとった。

康保三年十一月廿五日御記云、此夜上野大守親王、於昭陽舍廬、娶右大臣息女、於禁中行婚禮、頗雖無便、予在藩（村上）之時、天慶年中、於飛香舍、納故中納言女、衣有蹤跡、殊許之、（高平）（安子）（高明）（深集）（秘記）

当時の貴人達の一般的な婚姻ならば、為平親王は高明女のもとへ迎えられなければならない。だが二人の婚禮の儀は高明女を宮中に迎える形をとり、昭陽舎においてなされた。二人の婚儀は、あたかも女御の入内、あるいは東宮妃の御参りの如く、妻となる女性を宮中に迎えたのである。皇太子ではない、単なる三品親王があたかも帝や東宮の如き婚礼を執り行ったのである。これはきわめて便無きこと、異例な事であった。ただしこの婚儀の形式も前例があった。それは「予在藩之時」と記す如く、村上天皇自身の婚儀がそうであった。村上天皇が安子と結婚したのは、天慶三年（九四〇）四月十九日のことであった。

三品成明親王於飛香舍娶中納言左衛門督藤原師輔卿女。（安子）

（日本記録）
（同日案）

この時、村上天皇はまだ「藩王」、三品親王であり、東宮ではなかった。村上天皇が安子を飛香舎に迎えて結婚した時は、まだ醍醐天皇の多勢いる親王達のうちの一人でしかなかった。

先述した如く、村上天皇が皇太子となったのは、天慶七年（九四四）四月二十二日のことである。安子を飛香舎に迎えるという、東宮並の婚儀を挙行して四年間経過している。この為平親王の婚儀のあり方を見ると、村上天皇は憲平親王の即位後の次期皇太子として、憲平親王の弟である、為平親王を望んでいたことは明らかである。右大臣高明女を為平親王妃として昭陽舎に迎えることは、憲平親王の次に為平親王の立太子をと考えていた、村上天皇の強い意志・決意の表明でもあった。当時の公卿・殿上人達は、為平親王の婚儀のあり方を、天慶年間の親王としての婚儀、そして立太

子、即位に至った村上天皇の故事について、重ね合わせて考えていたであろうことは、疑いがないと言えるのではないか。公卿・殿上人は、次期東宮候補として為平親王をと望んでいる帝の気持ち、痛い程知ることができたと言えよう。

為平親王の外祖父・師輔の死後の応和四年（九六四）の為平親王に対する、劔の下賜と、それに引き続く「子の日の遊び」という厚い配慮。続いて母・安子亡き後の康保二年（九六五）の為平親王に対する、毎年別の給、元服時の叙三品、任上野大守という、経済的安定を考えた殊遇。そして康保三年（九六六）の昭陽舎における婚儀。どれをとっても、村上天皇が如何に為平親王を大切に、掌中の珠の如く慈しんでいたかを示さないものは無い。

表1参照

表 I (村上天皇・為平親王 対照表)

村上天皇		為平親王	
年齢	年月日	年月日	摘要
誕生	延長四年(九六六) 六月二日	天曆六年(九三三)	[逆算]
五歳	延長八年(九三〇) 九月二日	父帝讓位(同二九日崩御)	
七歳	承平二年(九三三) 二月二日	天德二年(九三〇) 一〇月二七日	母・安子の立后
九歳		天德四年(九三六) 三月一九日	初読書(御註孝経) 飛香舎
		五月四日	外祖父・師輔薨去
一三歳		応和四年(九六四) 正月二日	劔を賜う

一三歳				応和四年(九四六) 二月五日	子の日の遊び(北野)
一四歳				康保二年(九六五) 四月二九日	母・中宮安子崩御
				正月二九日	別給(毎年の)を賜う
				八月二七日	元服 叙三品
				十一月二九日(大晦日)	任上野大守
一五歳	天慶三年(九四〇) 二月二五日	元服 叙三品 殿上		康保三年(九六六) 二月二五日	婚礼 右大臣女 昭陽舎
一六歳				康保四年(九六七) 五月二五日	父・村上天皇崩御 清涼殿
				九月一日	弟・守平親王立太子
一七歳	天慶五年(九四二) 二月一三日	任上野大守			
一八歳	天慶六年(九四三) 二月八日	任太宰師			
一九歳	天慶七年(九四四) 四月二三日	立太子			
二二歳	天慶九年(九四六) 四月二〇日	即位			

三、悲劇の始まり

為平親王と高明女の婚礼が行なわれた昭陽舎・梨壺も、実は深い意味があったと思われる。昭陽舎・梨壺は村上天皇にとつて、実に思い出の多い殿舎ではなかったのか。昭陽舎には天曆二年(九四八)の四月頃まで、故中宮・安子が住

千四
んでいた。安子は当時梨壺女御とよばれ、そこに住んでいたのである。村上天皇にとっては若き日の、思出深い殿舎

と言つて過言ではない。このありし日の若き安子を主とした梨壺で、為平親王の婚儀を行うことは、そこに迎えられた女は誰れであれ、安子の許しを得て嫁として迎えられようという、象徴的な行為でもあったのではないか。

また天曆五年（九五二）十月には、この梨壺に撰和歌所が置かれた。ここでは『後撰和歌集』の編纂と、『万葉集』に訓点をつけるという、村上天皇の治世における、一大文化事業がなされた場所でもある。この様な、村上天皇にとっては思出深い殿舎が、梨壺であった。そこが為平親王の婚礼の場とされたのである。

加えて、為平親王の迎えた高明女について一言しておきたい。師輔・安子という九条流の強力な後見を亡くしたのが為平親王である。故安子の兄弟は年も若く、伊尹はまだ参議であり、それも末席に近かった。村上天皇としては、為平親王を次期東宮に擁立したいと考えていたとすれば尚更、しっかりとした人物を為平親王の後見にしなければならぬ。為平親王が元服してから、高明女と昭陽舎で婚儀を執り行なうのに、一年以上の期間が空いている。これは何を意味するのであろうか。これはわざと空白期間があったのではない。中宮安子崩御後、九条流と小野宮流の実頼や小一条流の師尹との間の争いが次第に表面化し、藤原氏の人々が為平親王に、妃を出すのを控えていた。様子を見ていたのではないだろうか。藤原氏の中からは為平親王妃を出しづらかったのではないか。女をもった源氏の人々にとつても、為平親王妃を差し出して、内訌の激しくなった藤原氏のあらぬ疑いを受けるのも、つまらない選択と思つたのではないか。東宮・憲平親王妃は朱雀天皇の女・昌子内親王である。そこへ次期東宮との、帝や故・中宮安子の思召しの強い為平親王の妃として、源氏の女を入れたならば結果は明らかであろう。藤原氏の反発が怖くないわけがない。

為平親王の婚儀に、元服後一年以上の空白が生いたのは、

(1)は、藤原氏は内訌がしだいに激しさを加え、為平親王妃を自分の女から出そうと考える余裕をなくしていた。

(2)は、源氏は王族を妃にしている憲平親王に続いて次期東宮の呼び声の高い為平親王妃にまで王族の女を出した場合の、藤原氏から来る反発が怖い。

といった理由があったのではないか。そんな中で、村上天皇の方が積極的に人選をすすめ、結局源高明女に行きついたのではないか。

源高明女・為平親王妃の母は、故右大臣師輔の女(三君)^{註一五}であり、三君没後の高明の後妻はやはり師輔の女(愛宮)

であった。この様な関係で、安子が立后した折りの中宮大夫は源高明であった。^{註一六}源高明は藤原氏の中でも、特に師輔の

一族・九条流の人々とは親しく、近しい関係にあったと言える。また師輔その人も醍醐天皇の一族と複雑な血縁関係を結んだ人物である。『尊卑分脈』によれば、師輔と結ばれた醍醐天皇の皇女は、康子内親王と雅子内親王の二人の名が知られている。師輔の女で醍醐天皇の皇子と結婚した女性が四人。一人は村上天皇の中宮・安子で一人は重明親王の北方・登子、いま一人は高明の室の三君である。この三姉妹は、伊尹や兼家達と同腹であった。そして高明室・三君の後妻となった愛君(母は雅子内親王)^{系図Ⅲ参照}がいるのである。

その中でも特に、この様な複雑にして濃い血縁関係で結び合っていたのが、師輔並びにその子供達と、村上天皇であり源高明であった。村上天皇は為平親王妃の問題が遅滞し、進展しない間に、同族の異母兄である源高明の女を、為平親王妃として迎えるしか残された解決方法はない、という結論に落ちついたのではないか。そこで康保三年(九六八)正月に、大納言であった高明を右大臣に任じたのであろう。即ち為平親王の後見とする為に。そして十一月二十五日の昭陽舎・梨壺における、為平親王と高明女との婚儀となつたのであろう。

だが為平親王の華やかな絶頂期も、父村上天皇の在藩中の先例に倣った、宮中における嫁娶までであった。翌康保四年(九六七)五月二十五日に、父村上天皇は讓位することもなく清涼殿で崩御を迎えてしまう。村上天皇は生前に皇太

子憲平親王に、位を譲ることができなかったのである。村上天皇が生前に讓位ができたならば、憲平親王の即位と共に、為平親王の立太子を見ることもできたはずではないだろうか。兄の為平親王を飛び越えて、弟の守平親王が東宮に冊立されるなどということは、考えられないことであつたらう。守平親王の立太子があるとすれば、それは為平親王の次という結論に落ち着かざるを得なかったのではないか。しかし村上天皇は生前に退位することはできなかった。たぶん左大臣実頼以下の反対が強かつたのであろう。

憲平親王に続いて、為平親王が皇太子となつたとすれば、藤原氏全体にとっては由々しき問題となりかねなかつた。憲平親王妃は朱雀天皇の唯一人の女・昌子内親王である。憲平親王即位後、昌子内親王の立后はほぼ確実である。次いで為平親王が東宮となれば、東宮妃も源氏の出、王族である。昌子内親王も高明女も、全て醍醐天皇の孫女である。藤原氏にとって、昌子内親王（中宮と仮定して）や高明女（東宮妃と仮定して）に男子が誕生すれば、摂関政治の根幹にかかわる大問題になりかねないのである。外戚として振つてきた政治権力が、醍醐源氏に移りかねないのである。康保三年（九六六）十一月二十五日（為平親王の嫁娶）の時点で公卿十六人中、醍醐源氏は右大臣高明を筆頭に、中納言兼明・参議重光・同延光の四人。一方、摂関家の一族（忠平の子孫）は、左大臣実頼・大納言師尹・中納言師氏・参議に伊尹と頼忠の五人。勢力はほぼ拮抗していた。

村上天皇が讓位をし、為平親王が東宮に冊立されたとすれば、それはまさに摂関家として、権力を壟断してきた藤原氏にとって、危機的情況を迎えかねない事態となりうるのである。とすれば村上天皇の讓位を阻み、東宮擁立問題を先送りし、事態の鎮静化を図るのが、一番の得策となつたのではないか。ところが為平親王の婚儀から一年もせず、村上天皇が亡くなってしまったのである。摂関家の人々にとっては、当時まだ九歳であつた守平親王を皇太子に冊立するか手だてはなかつた。守平親王を皇太子に冊立すれば、少なくとも元服までの五年前後の時間を稼ぐことができるので

ある。一方、皇太子にはなれなかった為平親王の落胆は、推し量れない程深いものがあつたらう。また右大臣高明とその女・為平親王妃の嘆きも、並大抵なものではなかったと思われる。

翌安和元年（九六八）十月二十六日には、大納言伊尹女・女御懷子に、摂関家の人々にとっては待望の男皇子の誕生があつた。^{註二八}この冷泉天皇の第一皇子・師貞の誕生により、為平親王立太子の夢はほぼ絶望となつたといつてよい。さらに追いうちをかけるように、安和二年（九六九）三月二十五日には高明の左降が決まつた。安和の変である。その後円融天皇が即位をし、天祿二年（九七二）十月二十九日に、太宰府に員外帥として流された高明召還が決まり、翌天祿三年（九七二）四月二十日に高明は京に帰つてきたのである。

落胆の境地にあつた為平親王並びにその妃にとつて、高明の召還と、天祿三年（九七二）に誕生した婉子女王^{註二九}が、唯一の心のなぐさめであつたらうと思われる。

この為平親王の名が『日本紀略』等から一時的に名が消える。それは、安和元年（九六八）十一月二十五日の、冷泉天皇の豊楽院小安殿遷御に伺候した親王の中に、「爲平」と短く記されているのを最後とする。その後先述の安和の変が起き、高明が配流先から上京する事などあるが、天元元年（九七八）十一月二十八日の『日本紀略』の記事まで、十年間に亘り為平親王の名は出てこない。その記事には、

式部卿爲平親王聽_二乘_一輦出入宮門_一。

と記されている。これは注意を引く記事である。一つは「式部卿」と記されている事。いま一つは「聽_二乘_一輦出入宮門_一」と輦車が聽された点にある。

為平親王が式部卿に補された正確な日時は不明である。為平親王の前に「式部卿」であつた親王は、貞元元年（九七六）九月十日に薨じた二品式部卿元長親王である。^{註三十}とすれば為平親王が式部卿に補されたのは、貞元元年（九七六）九

月十日以降、天元元年（九七八）十一月二十八日の間であろう。為平親王は式部卿に任ぜられ、輦車が聴された頃から名譽が回復されたと言うか、公卿社会に名譽ある形で復帰したのではないか。為平親王の名譽ある復帰は、次の年の天元二年（九七九）正月三日の『日本紀略』の次の記事であきらかである。即ち、

聽_下太政大臣并式部卿爲平親王乘_三牛車_一從_二上東門_一可_出出入_之由。

牛車に乗って上東門からの出入りを、太政大臣頼忠と為平親王だけに聴されたのである。その後永観二年（九八四）には恭子女王の誕生を見、寛和元年（九八五）十二月五日に、十四歳となった婉子女王が、女御として花山天皇の後宮に_{三十一}入る。不運なことに、花山天皇は翌年の六月二十三日の暁に出家してしまうのは有名な話である。『小右記』等を参考にすれば、婉子女王はその後、藤原実資の室となり、長徳四年（九九八）に没してしまう。誠に言いようも無く、哀れを催す結末である。

寛和二年（九八六）八月八日には、為平親王の女・恭子女王が三歳で、伊勢の斎宮に卜定_{註三十一}された。為平親王の二人の女が一人は女御として花山天皇の後宮へ、いま一人は一条天皇の斎宮として、望まれて伊勢へ下るのである。このことは正にその血の尊貴な点を買われたからにちがいない。花山天皇にしても一条天皇にしても、婉子女王や恭子女王と祖母（中宮安子）を同じくする村上天皇の孫にあたるのである。為平親王の女達は、円融天皇の天元元年頃に名譽を回復された、父・為平親王の出自の尊さを買われたのである。翌寛和三年（九八七）七月二十一日に、為平親王は相撲司別に任命される。それは『日本紀略』に、

今日。式部卿爲平親王。兵部卿具平親王。爲_二左右相撲司別當_一之由。被_下宣旨。

と、具平親王と二人で、それぞれ左右の相撲司別當に任ぜられた。具平親王は『栄花物語』の中で「中の君」と記された為平親王の女を北方にする人物である。この頃既に結婚していたか否かは不明であるが、二人の間には源師房と隆姫

(藤原頼通室)の存在が知られている。眞平親王も血の尊さからいえば、為平親王には劣らない。醍醐天皇の孫・莊子女王と村上天皇の間に誕生した皇子である。為平親王の異腹の弟宮にあたる。

為平親王は、その後、寛弘七年(一〇一〇)十月十日に仏門に入り、十一月七日に薨去する。年は五十九歳であった。いつ一品に叙されたかは不明。

この為平親王の生涯を見てみると、その生まれの尊さ故に翻弄されたと言える。なまじ中宮安子の腹に生まれたが故に、悲劇的な体験を受けたと言えよう。次期東宮候補が結婚を期に、一転して流罪人の一族、関係者となり、人生が暗転する。時が過ぎ名誉を回復されたとは言え、安和二年(九六九)に受けた、義父源高明の左降による痛手は、その生涯つきまとうたのではないか。為平親王は母が摂関家の出でなければ、東宮憲平親王の弟でなければ、別の一生があったのではないか。

この為平親王の息子達も、その血が尊貴なるが故に壓殺されそうになったのではないか。長男憲定は長徳二年(九九六)右兵衛督で従三位に叙されるが、その後は参議に上がることもなく、寛仁元年(一〇一七)六月二年に、非参議の従三位右兵衛督で薨じている。三十三彼は従三位に叙された後、二十二年間もそのままに捨て置かれたのである。憲定は、『小右記』長和二年(一〇三三)七月十二日の条に、皇太后彰子から、十八歳になる女の宮仕えの話が申し込まれ、実資に相談をするが、その末尾に「武衛太愚也」と書き添えられた。憲定は実資の故北方・婉子女王の兄弟である。実資と政治的な利害関係、対立があったとも思えない。相談を持ちかける位であるから親しかったとも言えよう。その記事の中で、

武衛者故(爲平親王)式部卿宮子、謂其息女李部宮孫女、其寄尤尊、

と、実資は憲定の血の尊さについて言及していながら、その末尾に大変な愚者と記す。憲定女はその血の尊貴な故に宮

仕え求められた。そして父憲定はそれを断れなかったのである。彼も父同様、その生まれ故に壓殺されたのである。

また従四位下侍従の敦定も「尾籠人也」と記されている。註三十四この尾籠人というのも、プライドが高過ぎて、その言動に

鼻持ちならない面が沢山あったから、記されたのではないだろうか。彼は村上天皇の孫にあたる、花山天皇や一条天皇とは、祖母（安子）を同じくする従兄弟であり、一番血の濃い一族である。非常に由緒正しい血統である。彼らが世に入れられなかった（昇進が摂関家の子息より遅いのは当然と思えるが、例えばこのような不満）と感じたとすれば、世人に対し不快な気持ちにさせる言動を吐かないとも限らない。敦定も高貴な血が災いしたのではないか。

二男の頼定は貞元二年（九七七）に誕生し、寛仁四年（一〇二〇）六月十一日に四十四歳で薨去する。頼定は寛弘二年（一〇〇五）に左中将で蔵人頭に任命され、寛弘六年（一〇〇九）に正四位下で参議に補された。その後は伊與権守をかねるだけであった。だが長和五年（一〇一六）の後一条天皇の即位にあたり、従三位に、そして同年十一月の大嘗祭では、兼主基国司に補されて一階を加えられ、正三位に昇叙した。家の出自のプライドを捨てて考えれば、大変名譽なことである。またその様な二階級の昇叙も、一年の内に昇進したのであれば、大変な好遇を受けたとも言える。最後は正三位参議左兵衛督で生涯を閉じた。註三十五四十四歳である。頼定は憲定や敦定の如く、現天皇家と祖（村上天皇と中宮安子）を同じくするという血統の重さ、至尊の家というプライドに壓殺され、自分を失うことはなかったたのである。たぶん冷静に摂関家との関連を見つめ、身を処していたのではないか。そういった点で、頼定は「太愚」でもなければ「尾籠」でもなかったと言えよう。その他には従四位上にまでなった頼定と教定等がいるが、あまりはつきりしたことはわからない。

為平親王並びにその一族は、村上天皇の子孫であり、加えるに中宮安子腹だったが故に、その血の重みに翻弄され、自分を見失い踊らされた、悲劇の人が多かったと言える。では『栄花物語』ではどうか。次にそれを考えてみたい。

四、至尊の藩屏 村上源氏

『栄花物語』の中で為平親王について語る部分は、卷一「月の宴」が中心である。そこでは〔一四〕節の「皇子皇女の誕生」、〔一七〕「実頼・師輔・師尹の性質 師輔の信望」、〔二五〕「源高明女、為平親王に嫁す 重明親王薨す」、〔二六〕「師輔の薨去」、〔三〇〕「為平親王東宮に立たれず」、〔三四〕「中宮安子重態に陥る」、〔三六〕「中宮安子崩御、選子内親王御誕生」、〔三七〕「故中宮安子御葬送」、〔四八〕「村上天皇御病惱」、〔五一〕「為平親王と源高明の落胆」、〔五七〕「為平親王に対する世評」、〔五八〕「為平親王子の日の御遊」、〔六〇〕「源高明陰謀の噂、大宰権師に左遷」、の十三ヶ節。全体の六十五パーセントを占め、その内容も為平親王その人に直接言及するものが多い。卷二「花山たづぬる中納言」以下はほとんど、為平親王に直接関係する記事は少なく、専らその節で語られる人物の、父あるいは祖父としてのみふれられることが多い。

卷二では〔三五〕「為平式部卿宮女婉子入内」、〔四〇〕「濟時女・為光女、天皇に召さる」、卷三では〔三五〕「為尊・敦道親王の元服 斎宮に恭子女王、斎院に選子内親王」、卷十一〔二〕「源頼定承香殿女御と密通」、卷十四〔二九〕「顕光・頼定不和、堀河院領有争い」、卷二十四〔二〕「頼通の妾対の君」、卷三十九〔二七〕「師房薨去」の七つの節にすぎない。このうち卷十一以降は、故人として、彼の子孫の血統の由緒正しき、素晴しき尊さを語るために記されているにすぎない。そこでまず、各節で為平親王に対して、登場人物の父・祖父として、描写されるものから見てゆきたい。そして卷一「月の宴」の問題点に言及したい。

『栄花物語』卷三十九〔二七〕では、右大臣師房の出自を語る部分で、

村上のみかどの御孫、中務宮具平の御子、式部卿宮為平の御女の御腹、いはん方なくあてにやむ事なき御有様なり。

(七)『榮花物語全注釈』
三四一頁

「式部卿(為平親王)の御女の腹」と記されるのみ。また卷二十四(二)では頼通の妾で、対の君と呼ばれた女性の出自を語る部分で、対の君の父憲定に言及し、

故式部卿宮の御子の右衛門督は、関白殿上の御伯父の子にこそはおはしけめ。
(八)『榮花物語全注釈』
六二―三頁

憲定の父で、頼通の北方(隆姫)の伯父であるとふれるのみである。卷十四(二九)では顕光と頼定の不和から、堀河院の領有争いが生じる。顕光の嫌った頼定に対して、

源宰相をも、いと事の外に思ひきこえさせ給べき人かは。故式部卿の宮、いみじき物におぼしたりしうちにも、たゞ
今の関白殿の尼上も御妹におはしませば、いと覚えありてこそおはすめれ。
(九)『榮花物語全注釈』
五四―四頁

為平親王が可愛がっていた子供であると記し、声望もある方だという。顕光が無下に頼定を嫌った点に対し、頼定の弁護をするのに、為平親王が語られるのである。また卷十一(二)も同様に「故式部卿の源宰相頼定の君」と、源頼定を語る場合に、その父が式部卿であったと注記しているにすぎない。

卷三(三五)では為尊親王と敦道親王の二人を、彈正宮と帥宮に任じた理由に、「式部卿・中務卿・兵部卿などにては、村上の先帝の親王達の皆おはしませば」、彈正尹と大宰帥に任じたと説く。引き続き齋宮に言及し「この頃の齋宮にては、式部卿の宮の女御の御おとうとの宮ぞおはします。」と、恭子女王の出自を語る部分に記されるのである。

これ等は全て、そこに語られる人物が、式部卿為平親王の子孫である。即ち高貴な家の出であることを語る理由から、為平親王に言及したといえる。

卷二(三五)でもほぼ同じである。記事の中心は婉子女王の花山天皇の後宮への御参り、入内であり、その婉子女王の入内の記事の中に父・為平親王に言及する部分がある。即ち、

かかる程に、式部卿の宮の姫君、(爲平)いみじうつくしうおはしますといふ事を聞しめして、日に御文あれば、「かばかりの人を引き込めてあるべきにあらざ」とおぼして、急ぎたち参らせ給ふ。故村上のいみじきものに思ひきこえ給し四の宮の、源帥の御女の腹に生ませ給へる姫宮にて(高朝)(中略)かひありてめでたし。(『栄花物語金活紙』二七二頁)

婉子女王の父であることが一つ。為平親王にふれるものとして、「故村上のいみじきものに思ひきこえ給し四の宮の」と、村上天皇が非常に大切にしていた方であったと記す。又〔四〇〕では花山院の女御達の中で「式部卿の宮の女御ぞ時めかせ給ふ」と、婉子女王の父であることを記すだけの記事である。

『栄花物語』では婉子女王の入内については、花山天皇が切望したと記す。そしてその「かひありてめでた」といふ。また「時めいた」と非常に好意的に記している。

『大鏡』ではこの辺のことを、

式部卿の宮、わが御身のくちをしくほいなきをおぼしくづはれてもおはしますで、なをすゑのよに、花山院のみかどは、冷泉院のみこにおはしますば、御甥ぞかし、その御時に、御女たてまつりたまで、御みづからもつねにまいりなどし給けるこそ、「さらでもありぬべけれ」と、よの人もいみじうそしりまうしけり。さりとても、御繼などのおはしますば、いにしへの御本意のかなふべかりけるともみゆべきに、御かど出家したまひなどせさせたまひてのち、又いまの小野宮の右大臣殿(眞寶)の北方にならせたまへりしよ、いとあやしかりし御事どもぞかし。

(第三卷「御輔法」二二〇頁)
本文は日本古典文学大系

と、為平親王が、自分が立太子できなかつた件について、非常に「くちをしく」不本意だったのに、その自覚も無く、また懲りもしないで婉子女王に夢を託したと馬鹿にしている。為平親王は生まれるかどうかも知れない、婉子女王所生の皇子に、過去に叶わなかつた自分の望み(立太子の夢)をかけている人物であると描写する。作者は為平親王の思い

違いを、口をきわめて悪罵している。世の中の動き、転変を理解することのできない、時代錯誤の為平親王、物笑いの種になる為平親王像が浮び上がるのではないか。そしてその後、締めくくり駄目押しとして、期待を持って入内させた婉子女王の相手、花山天皇は早々と出家をしてしまう。婉子女王には皇子の誕生はなかった。出家後はどうした気の迷いか、為平親王の女は右大臣実資の北方となってしまった。作者は婉子女王の出家なりを、願ったのだろうか。それが意に反して再婚するとは、「いとあやし」「いことなのである」。

『大鏡』に記された為平親王は東宮になれなかった過去の無念さ、口惜しさをきちんと理解できないのである。懲りることも無く、過去に描いた立太子の夢を、どうなるか解りもしない女・婉子女王の結婚につないだ人物として造型されている。そこには過去のかなわなかった夢、栄光を思い、出自のよき血統のよさに捕われた、時代錯誤な愚かな人物像が浮び上る。為平親王は帝の皇子であるという尊い生まれ、血筋は、万人が敬意を払いそれなりの処遇をしてくれると期待している、古風な考え方に捕われているとも言える。新しい時代の中で足掻き、ついには没落していった多くの貴人達を目にしてきた人物の、冷徹な評価が記されているのである。『栄花物語』では意地が悪い程の、このような冷徹な評価は下さない。婉子女王の入内は、帝に強く望まれたから承諾したのである。そして為平親王は、あの素晴しかった故村上天皇の、大切に育ててきた愛児であったと描くのである。まさに生まれのよき、高貴さを讃美しているのである。それも無条件に。

『栄花物語』巻二以降に描かれる為平親王は、巻三十九〔二七〕節で語られる師房評に収斂してゆくのである。即ち、師房は村上天皇の皇子・具平親王を父とし、村上天皇の孫を母とする、「いはん方なくあてにやむ事なき」人物なのである。そこに語られる為平親王は、村上天皇の皇子の中でも安子の腹になるが、唯一人だけ即位できなかった親王であった。まさに特別高貴な親王なのである。安子腹の他の二人は帝となっており、為平親王は帝に准ずるのである。

この安子は師輔の子孫、即ち九条流の人々の「栄花」を生み出してくれた「宝の姫君」なのである。であるからこそなお、為平親王、並びに彼に連なる村上源氏は、同じ村上天皇の子孫の中でも、特別高貴な家系なのである。村上源氏中の村上源氏、至尊の村上源氏として、為平親王並びに波に連なる人々は描かれるのではないか。

五、『栄花物語』の語る事実

為平親王関係の叙述の中で、質・量ともに多いのは、巻一「月の宴」である。その中でも特に詳しく描かれているのは、源高明女と結婚する前後から、安和の変で義父の源高明が左遷される部分である。源高明女との結婚をする、為平親王はくり返し、村上天皇と安子の愛を一身に受け、次期東宮候補として、いつくしみ育てられていたと記す。だが高明女との結婚以降、外祖父師輔、母后安子の死を迎え、東宮擁立の可能性が次第に薄らいでくる。そして父、村上天皇が為平親王擁立を断念。おいうちをかけるように安和の変が勃発し、為平親王妃の父である高明の配流。このあたりが誠に詳細に描かれている。

この『栄花物語』巻一の各事件の配列・展開が、非常に興味のある形で記される。その特色は、為平親王の結婚から安和の変までの描かれ方である。その特色は、『栄花物語』での種々の事件の配列が、史実とは大きく異なっているという点にある。表Ⅱ参照『栄花物語』の方は次のような事件の展開を示す。

- 1、源高明女が為平親王に嫁す。
- 2、式部卿重明親王が薨去をする。引きつづき、為平親王が一品式部卿と呼ばれたと記す。
- 3、師輔の薨去と、村上天皇讓位の思い。
- 4、為平親王の東宮擁立が怪しくなる。

- 5、中宮安子の崩御。
- 6、為平親王の東宮擁立の断念。
- 7、村上天皇の崩御。
- 8、為平親王と高明の落胆。
- 9、守平親王の立太子。
- 10、為平親王子の日の御遊。
- 11、源高明、為平親王の東宮擁立を断念せず。
- 12、源高明の大宰府への左降。

表II (『栄華物語』と史実の対照表)

節	『栄華物語』での配列	順番	史実(年月日)
13	憲平親王立太子	1	天曆六年(九五二)七月三日
14	皇子皇女の誕生		
17	実頼・師輔・底伊の性質 (師輔の信望)		
18	安子立后	3	天徳二年(九五八)十月二七日
25	源高明女、為平親王に嫁す(元服の夜)	9	康保三年(九六六)二月二五日
	為平親王元服	8	康保二年(九六五)八月二七日

60	59	58	57	56	52	51	49	48	37	36	34	30	29	26		
源高明陰謀の噂、大宰権帥に左遷	冷泉天皇御譲位の噂	為平親王子の日の御遊	為平親王に対する世評	師貞親王（花山天皇）御誕生	守平親王立太子	為平親王と源高明の落胆	村上天皇崩御、東宮踐祚	村上天皇御病腦	故中宮安子御葬送	安子中宮崩御、選子内親王御誕生	中宮安数重態に陥る	為平親王東宮に立たれず	村上天皇譲位の思し召し	師輔の薨去	一品式部卿と呼ぶ	（重明親王薨す）
13		5		12	11		10		7	6				4	12	2
安和二年（九六九）三月二五日		応和四年（九六四）二月五日		安和元年（九六八）十月二六日	康保四年（九六七）九月一日		康保四年（九六七）五月二五日		応和四年（九六四）五月七日	応和四年（九六四）四月二九日				天徳四年（九六〇）五月四日	天延四年（九七〇）九月以降	天曆八年（九五四）九月一四日

『栄花物語』の展開では、為平親王と高明女の結婚は、元服の夜の事であると記す。

かかる程に、〔女上〕 後の宮もみかども、〔村上〕 四の宮を限りなきものに思ひきこえさせ給ければ、その御けしきにしたがひて、

よろづの殿上人・上達部、靡き仕うまつりてもてはやし奉り給ふ程に、やうやう十二三ばかりにおはしませば、御

元服の事おぼし急がせ給ふ。御女持給へる上達部は、いみじうけしきばみきこえ給ふに、宮の大夫と聞ゆる人、源

氏の左大将高明もいはずかしづき給一人女を、さやうにとほのめかしきこえ給ひければ、みかども宮も御けしきさや

うにおぼしければ、喜びてよろづしとのへさせ給て、やがてその夜参り給ふ。例の宮達は、我里におはし初むる

事こそ常の事なれ、これは女御・更衣のやうに、やがて内におはしますに参らせ奉り給ふべき定あれば、例の女御・

更衣の参りはさることなり、これはいと珍らかに様かはり今めかしうて、御元服の夜やがて参り給ふ。帝・後の御

よめ扱ひの程、いとをかしくなん見えさせ給ける。

(本文は「栄花物語全注釈」(以下同じ)二五節七三(四頁))

『栄花物語』では元服の夜に嫁娶が、宮中で行われたと、二度もくり返す。だが、為平親王の元服は康保二年(九六五)八月のことで、高明女を嫁娶したのが一年以上空いた、康保三年(九六六)十一月のことであった。また『栄花物語』では高明女や多くの公卿達が、為平親王の許へ女を差し上げようと色めき立たとあるが、これも先述した如く、村上天皇の方が高明女を指名した可能性が強い。元服から結婚までの一年以上の空白がそれを証明するのではないか。

また重明親王の薨去に關し、

かかる程に、重明式部卿の宮日来いたくわづらひ給ふといふ事聞ゆれば、師補 九条殿も「いかに〜」とおぼし嘆く程にうせ給ひにければ、(中略)御忌など過ぎさせ給て、この四の宮尊章をぞ一品式部卿の宮と聞えさすめる。

(「栄花物語全注釈」(二二五節七四頁))

式部卿重明親王が薨去したので、その忌が明けてから、為平親王を「一品式部卿宮」と称するようになったと記す。こ

れも大きく異なる。重明親王は天曆八年（九五四）九月、為平親王三歳の時に、既に亡くなっている。為平親王は元服の時三品に叙された。一品に叙された年月は不明である。式部卿には元長親王が貞元元年（九七六）九月の薨去まで、その地位にあったと考えられる。為平親王が式部卿と初めて記されるのは、貞元三年（九七八）の十一月のことであった。元服から結婚の頃とすれば、上野大守に補されたのである。大きく事実誤認をしているか、あるいは何か意図があったか。この辺のことを、村松博司氏は「為平親王の嫁娶は、安子中宮の崩御後であるのに、これを生前の事であるかのように記述しているには、作者の迂闊もしくは無知によるものではなく、恐らく母の愛情を強調しようとしての改変であろう」と説く。この母の愛情を強調する為の改変というのは、ある面では正しいであろう。

『栄花物語』では、元服の夜嫁娶をし、その後しばらくして一品式部卿になった為平親王は、外祖父師輔の死を迎える。

かかる程に、九条殿師輔惱しうおぼされて、御風などいひて、御湯茹などし、葉きこしめして過ぐさせ給ふほどに、まめやかに苦しうさせ給へば、みやも里に出でさせ給ひぬ。男君達あまたおはすれど、まだはかばかしくおとなしきもさすがにおはせず。中におとなしきは、中将伊尹などにておはするもあり。「いかにおはすべきにか」と、内もいみじうおぼしめし嘆きたり。東宮冷泉院の御後見も、四・五宮冷泉院の御事も、ただこの大臣を頼しきものにおぼしめしたるに、（中略）天徳四年五月二日出家させ給て、四日うせさせ給ひぬ。御年五十三。ただ今かくしもおはしますべき程にもあらぬに、口惜しう心憂く、惜しみ申さぬ人なし。（中略）返す返すおぼし惑はせ給ふ。宮おはしませば、よろづ限なくめでたし。一天下の人、いづれかは宮に靡き仕うまつらぬがあらん。

（『栄花物語』全注版）（一）
（二二六）節 七七頁

東宮や為平親王・守平親王の後見として、村上天皇は「ただこの大臣を頼しきものにおぼしめ」していたと記す。また世間の人々も、師輔のあまりにも若い死を、「口惜しう心憂く、惜しみ申さぬ人なし」という状態であったと描く。そ

して村上天皇もほとと途方に暮れたが、中宮安子がいるので、万事よかった。世間の人々で、中宮に靡かない人はいなかったと記す。師輔の死を惜しみ、師輔を讃美している。帝もこの師輔を大層頼りにしていた。この師輔亡き後は、中宮安子が生き残っていたので、帝も心強く感じ、世間の人々も中宮に靡かない人はいなかったと記す。師輔に引き続き、中宮安子を師輔に代わるものであると讃美するのである。では何故師輔の死を、為平親王の婚姻後に記したのか。その意図は何であつたのか。大きな疑問が残る。

師輔に対する讃美は、この後も回想する度ごとに続くのである。即ち、村上天皇は讓位を「二一九」節で思うのであるが、その前の節で、

九条殿〔師輔〕の急ぎたる御有様、返す返すも口惜しういみじき事をぞ、みかども〔村上〕后もおぼしめしたる。〔安子〕

〔采花物語全注版〕
二八八節 八一頁

村上天皇も中宮安子も師輔の死を非常に残念に、口惜しいことと考えていたと記す。ここにも師輔に対する賞讃の言葉が描かれている。そして「二一九」節では、

世の中何事につけても変りゆくを、あはれなる事にみかども〔村上〕おぼしめして、「なほいかで疾う下りて心やすきふるまひにてもありにしがな」とのみおぼしめしながら、「さきさきも位ながらうせ給ふみかどは、後後の御有様いとところせきものにこそあれ」と、「同じくは、いとめでたうこよなき事ぞかし」とまでおぼしめしつつぞ、過ごさせ給ける。

〔采花物語全注版〕
八二頁

出家を願いながらも、迷っていて踏み切れない、村上天皇像が描かれている。村上天皇の出家の思いは、師輔の死に起因し触発されたのだろうか。師輔の死が帝にとって痛手であつたことは、疑いの無かつたことであろう。だが本当にそうであつたのだろうか。

先述した如く、村上天皇に出家の動機があるとすれば何か。それは、憲平親王の即位を見届けた上で、最愛の寵児と
言える為平親王の、立太子を見届ける所にあつたのではないか。可能性としてはこれが一番強い動機であろう。為平親
王の結婚の後に、村上天皇の讓位を考える描写が置かれてゐるのは十分納得できる。だが出家の動機が、師輔の死と結
びついていたかとなると、大いに疑問が残る。全面的に頼りにし、信賴していた人物であつたからと言つたにしても
ある。出家動機の内何パーセントかは占めたにしても、子を思う親心の動機の方が何倍かは強いと思われる。

『栄花物語』は〔二九〕節で出家を思つて、心乱れる村上天皇を描く。引き続きその後、為平親王の東宮擁立を断念
しなければならぬ、村上天皇の苦惱を記す。

即ち、〔三〇〕節で、

式部卿の宮も、今はいとようおとなびさせ給ひぬれば、里におはしまさまほしうおぼしめせど、みかども〔村上〕后も〔安子〕ふり
がたきものにおぼしきこえさせ給ふものから、怪しき事は、「みかどなどにはいかが」と見奉らせ給ふことぞ出で
来にたる。されば五の宮をぞ、さやうにおはしますべきにやとぞ。まだそれはいと稚うおはします。それにつけて
も、「おとどのおはせましかば」とおぼしめす事多かるべし。

(栄花物語全結帙)
一八三―四頁

少し混乱する。帝も后も手放しがたい位、慈しみ育ててゐるのである。それが何故、為平親王を将来の天皇とするには、
問題が生じたのであろうか。『みかどなどにはいかが』と見奉らせ給ふこととは、どのような出来事であつたのだら
うか。やはりそれは描けなかつたのである。そこで再び、「おとどのおはせましかば」とおぼしめすこと多かるべし』
と、師輔を讚美するのである。故師輔が生きていたなら、大いに村上天皇の力になつたであらうと記されている。師輔
が生きていたなら、為平親王を次期東宮に策立するのに、何等問題は起きなかつたのであると、『栄花物語』の作者は
記してゐるのではないか。

そして次に、中宮安子の崩御が描かれる。中宮安子の崩御は、為平親王の結婚に先だつこと二年、応和四年（九六四）四月二十九日のことであつた。決して為平親王の元服の前でも、結婚の前でもない。為平親王は母后・安子崩御後、元服をし結婚をしている。中宮安子の崩御については、（三三四）節から（三三七）節にいたる大部の叙述がある。安子の崩御は為平親王の元服の前年のことであり、そこに描かれている為平親王は、あどけない泣をそそる幼少の人物として描かれている。例えば、（三三〇）節の崩御直後の場面で、「宮達まだ稚くおはしませば、何ともおぼしたるまじけれど、おほかたのひびきにいみじう泣かせ給ふ。式部卿の宮は、伏し軋び泣き惑はせ給ふもことわりにいみじう」（『采花物語全注釈』為平九三頁）と、倒れ伏して大いに嗚咽したと記す。また次の（三三七）の葬送の場面では、「よろづよりも、式部卿の宮の御車の後に歩ませ給ふこそ、いとみじう悲しけれ」と、為平親王に対して最大限同情した、悲しみをさそう描きかたをする。

中宮を失つた村上天皇の描かれ方も、強烈な印象を読者に与える。（三三〇）節では「内にも聞しめして、すべて何事もおぼえさせ給はず、御声をだに惜しませ給はず、ゆゆしきまで見えさせ給ふ御有様なり」（『采花物語全注釈』為平九三頁）と、我を忘れ、見苦しい程の醜態をさらす、人間味豊かな村上天皇が描かれている。また（三三七）節でも「この程はすべて御戯にも女御・御息所の御宿直絶えたり。いとさまことに孝じきこえさせ給ふ」（『采花物語全注釈』為平九六頁）と、亡き安子のことを忍び、大変嚴重に身を慎み、追善供養をする帝が描かれている。そして為平親王の東宮策立を正式に断念する場合が記される。それは村上天皇の崩御の直前にやってくる。

月来内〔村上〕に例ならず悩しげにおぼしめして、御物忌などしげし。「いかに」とのみ恐しうおぼしめす。御読経・御修法など、あまた壇行はせ給ふ。かかれどもさらに験もなし。例の元方の霊なども参りて、いみじくののしるに、「なほ世の尽きぬればこそ、かやうの事もあらめ」と、心細くおぼしめさる。かねては下りさせ給はまほしくおぼされしかど、今になりては、「さはれ、同じくは位ながらこそ」とおぼさるべし。御心地いと重ければ、小野宮の

おとど忍びて奏し給ふ。「もし非常の事もおはしますさば、東宮には誰をか」と御けしき給はり給へば、(五七七)「式部卿の宮

をとこそ思ひしかど、今におきてはえ居給はじ。守平、円融院五の宮をなんしか思ふ」と仰せらるれば、うけたまはり給ひぬ。

(「栄花物語全注釈」(一)四八)
節二四〇五頁。

村上天皇の病は篤く、物忌なども数多く行われ、読経や修法は数限りなく、沢山の壇を設けて行われたが、そのききめはなかった。却って中宮安子や東宮を苦しめる、元方の霊などが出現して村上天皇を苦しめたのである。村上天皇は以前考えたこともある、出家を思ってみたが断念したと記す。そんな病の篤い折り、小野宮の左大臣・実頼がやってきて、秘に次期東宮の帝の内意を伺うのである。帝はそこでもしつこく、「式部卿の宮をとこそ思ひしかど、今におきてはえ居給はじ。五の宮をなんしか思ふ」と、為平親王をと思っていたが、今はそうすることもできない、守平親王にと思つていと語るのである。

村上天皇は為平親王を、憲平親王即位後の次期東宮にしたいと、常々語るのである。だがその都度(師輔の没後と、崩御の直前)、理由をほとんど何も語らないで、帝は為平親王の擁立をあきらめたと叙述するのである。これは大変興味を引く描かれ方である。「栄花物語」を読む読者はこのような優柔不断な、村上天皇の意思表示をもどかしく感じないだろうか。為平親王の東宮擁立をためらった理由は何か。それは村上天皇にあったのである。

その後は「五一」節で、東宮に推されたという案内が無く、著しく落胆する為平親王と、その周囲の人々、並びに源高明の姿を描く。そして「五七」節では、村上天皇が為平親王に示していた愛情に対して、

宮の御おぼえの世になうめでたく珍かにおはしまししも、世の中の物語に申し思ひたるに、さしもおはしますさざりしかば、皆かくおはしますめり。みかどと申すものは、安げにて、又かたきことに見ゆるわざになんありける。

(「栄花物語全注釈」
一四四頁)

と、疑いをはさむのである。『栄花物語』の読者は、為平親王の東宮擁立がためになる理由は、世間で喧伝された程には為平親王に対する父帝・村上天皇の愛情が、深くなかったからであると説かれるのである。そして引き続き〔五八〕節では、為平親王の若かりし頃を回想し、子の日の御遊を記すのである。帝・后が一緒に世話をした、子の日の御遊の供に立った者達は「あるは後の御兄弟、同じき君達と聞ゆれど、延喜の御子中務の宮の御子ぞかし」〔栄花物語全注釈〕と、重光・延光・保光は中務宮代明親王の子供であり、兼通・兼家は安子の兄弟であったと記す。いづれ劣らぬ高貴な家柄の公達であったと回想をする。そして東宮になれなかった理由として、世間の人は言いにくそうに「源氏のおとどの御婿になり給しに、事違ふと見えしものをや」〔栄花物語全注釈〕と噂をしたと描く。母后が生きていた時代は、為平親王はとても華やかな環境にあったと回想するのである。

〔五七・八〕節では、作者は村上天皇の為平親王に対する愛情に疑問をさしはさむ。そして母・安子の生きていた時代まで遡って、為平親王の栄光に包まれていた前半世を描くのである。そして冷泉天皇の讓位の噂を記した次に、〔六〇〕節で安和の変を描くのである。安和の変の原因として「源氏の左の大臣の、式部卿宮の御事をおぼして、みかどを傾け奉らんとおぼし構ふといふ事出で来て」〔栄花物語全注釈〕と高明が政府の転覆を謀ったと記す。為平親王は出家しようと思ったが「をさなき宮達のうつくしうておほします、大北の方の世をいみじきものにおぼいたるも、ただ今は宮一所の御蔭にかくれ給へば、えふり捨て」〔栄花物語全注釈〕難かったと記す。

誠にあわれをもよおす結果となったのである。次に『大鏡』を見てみる。

六、『大鏡』の語る事実

為平親王が東宮に擁立されることもなく、彼の人生が暗転したのは源高明女との結婚にあった。このように説くのが

後世の史書『愚管抄』であり、それはまた『大鏡』の説く所でもある。この点は、『大鏡』の為平親王関係の叙述の中でも、特に詳しく描かれている。さわりの部分と言えよう。それは

この後の御はらには、式部卿の宮こそは、冷泉院の御つぎにまづ東宮にもたちたまふべきに、西宮殿の御むこにおはしますによりて、御おとゝのつぎの宮にひきこされさせたまへるほどの事ども、いとみじく侍り。そのゆへは、式部卿の宮みかど爲平にゐさせたまひなば、西宮殿高明のぞうに世中うつりて、源氏の御さかへになりぬべければ、御舅達の、たましひふかく、非道に御おとゝをばひきこしまうさせたまつらせたまへるぞかし。世中にも宮のうちにも、とのばらのおぼしかまへけるをばいかでかはしらん。「次第のまゝにこそは」と式部卿の宮の御事をばおもひ申たりしに、にはかに、「わかみやの御ぐしかいけづりたまへ」など御めのとたちにおほせられて、大入道殿兼家御車にうちのせたてまつりて、北の陣よりなんおはしましけるなどこそ、つたへうけたまはりしか。されば、道理あるべき御方人たちは、いかゞはおぼされけむ。そのころ宮たちあまたおはせしかど、ことしもあれ、威儀のみこそさへさせたまへりしよ、みたまへりける人も、あはれなる事にこそ申けれ。そのほど西宮殿高明などの御心地よな、いかゞおぼしけむ。さてぞかし、いとおそろしくかなしき御事どもいできにしは。

(『大鏡』第三卷「師輔」
伝一九二〇頁)

と記されていることで十分である。為平親王は冷泉天皇の次に東宮に擁立されるべきはずの人であった。しかし源高明の婿となったので、弟の守平親王に先を越されて、ついには東宮になることができなかつたと記す。その理由として、高明女を妃とした為平親王が即位することにでもなれば、高明の一族に政権が移り、源氏の世の中になってしまふ。それを怖れた安子の兄弟達がよくよく考えた上で、弟の守平親王を立太子させたのだと記す。『大鏡』「師輔伝」の中に記された為平親王関係叙述の主題は、守平親王立太子の理由を詳細に記す点にある。為平親王の立太子が阻止さえてきれば、舅達即ち安子の兄弟達の目的は達せられるのである。

康保四年（九六七）九月一日に、九歳の弟・守平親王が立太子した^{三十八}ことで、『大鏡』「師輔伝」に語られる、安子の兄弟

達の目的は十分に達せられた。彼等には、三君（安子の同腹の妹）を妻とし、三君没後、師輔女・愛宮を娶っている高明を左降する理由など皆無に等しいのである。高明は守平親王が立太子した後、同年の康保四年（九六七）十月十一日に正二位に叙された。引き続き十二月十三日には右大臣から左大臣へと転じ、かつまた輦車が聽されるなど、非常に手厚い処遇を受けている。安子の兄弟達にすれば、為平親王の即位の恐れさえ除去できれば、源高明が冷泉天皇の藩屏として、太政官の公卿として存在する方が、よかつたのではなからうか。為平親王の即位の夢が断たれさえすれば、為平親王と高明女との結婚は返って好都合であつたのではなからうか。高明女と為平親王が結婚をすれば、「醍醐の聖帝」と「堯の子の堯ならむ」と称揚された醍醐天皇と村上天皇の血を凝縮し、かつまた故中宮安子の血を受けついだ子供達が誕生する。称讃してもしきれない位高貴な生れといえよう。そんな二人の間に誕生した子供達や、為平親王あるいは高明その人達自身が帝の藩屏としてあれば、彼等に仕えられる帝の徳は、弥益益高いものと世間で思われるのではない。醍醐天皇や村上天皇、そして故中宮安子の血を色濃く受け継いだ、素晴しい人々が臣下として仕える天皇は、立派で素晴らしい人でなからうはずがない。即ち、彼等が仕えるであらう、帝の外戚を虎視眈眈と狙っている安子の兄弟は、自分が擁立するであらう帝の徳こそあがれ、評価の下ろうはずがない。帝の外戚の地位を虎視眈眈と狙っている安子の兄弟にすれば、為平親王の立太子さえ阻止できれば、それで十分よかつたと言える。

為平親王と高明女の間誕生するであらう子供達は、安子の血を引く非常に高貴な、村上源氏中の村上源氏、至尊の村上源氏として盛りたてて処遇してゆけば、それで問題は解決しよう。為平親王はその至尊の村上源氏の祖となり得たのである。そして高明はその血に、醍醐の聖帝の血をそえる、大切な外戚・後見という構図が描けてくるのである。

『大鏡』に描かれた為平親王の東宮擁立が失敗した件を敷衍して考えてゆけば、以上のような結論にならう。

為平親王が東宮に擁立されなかった原因は、源高明女を嫁娶したことに尽きるのである。「栄花物語」の記す如き、村上天皇の優柔不断にあったのではない。源氏に政治権力が移項しかねない恐れを、断つことにあったのである。それさえ断つことができれば、安子の兄弟達の目的は十分に達せられたのである。であるからこそ、安和の変は『大鏡』「師輔伝」には記されないのである。それは「師尹伝」に記されるのである。

七、結

『栄花物語』巻一「月の宴」に見られるような、為平親王関係の叙述の展開は、何故にそう纏められたのか。どのよ
うな視点で編纂されていったのであろうか。前途の表Ⅱ（『栄花物語』と史実の対照表）の如く歴史が展開したと、実
事を誤認していたのであろうか。あるいはまた、改変したとすれば作者の意図はなにか。

巻一「月の宴」の中の為平親王関係の叙述の中で、最後の方に配された「五七」節で記された如く、結果として村上天皇の為平親王に対する愛情が本当に薄かったのか。その様な事はあり得ない。拙論の第二節で述べた如く、村上天皇は師輔や中宮安子亡き後の、為平親王の後見を必死になって探したのである。そして醍醐天皇の皇子であり、自分の兄にあたる源高明に帰着するのに、一年以上の歳月を要したのである。村上天皇は、摂関家におけるはかばかしい後見を全て亡くした、最愛の皇子・中宮安子の遺子、為平親王の東宮擁立に向けた方策を必死で考え、それを実行するのに一年以上かかったのではないか。

為平親王の元服から婚儀に到る前後の、一連の動きを注意深く観察すると、次の事が言えよう。村上天皇は師輔を亡くしても、まだ精神的余裕があった。為平親王に剣を下賜したり、子の日の御遊までには、四年間の空白がある。だが中宮安子を亡くした後は必死だったのではないか。翌年には別給を与え、元服に際し三品に叙し、その後上野大守に任

ずるといふ、父帝にできるほぼ全ての恩寵を注いでいるのである。それはまた、自分の若かった頃、立太子以前の姿に、為平親王を重ね合わせていたのではないか。それに加えて為平親王の中に、亡き中宮安子の面影をも重ね合わせていたと推定できるのである。

ただし、村上天皇が立太子した時代と、村上天皇が為平親王の立太子を考えた時代とは、大きく異なっていた。

(1) 村上天皇が立太子した時点には、母後の穩子は健在註四十九であった。

(2) 伯父忠平は摂政関白という重責にあった。

(3) 結婚した時、妃・安子の祖父は忠平であり、父も中納言という顯官を占めていた。註四十

(4) 父・醍醐天皇のみが没していた。

安子には関白忠平、中納言師輔という立派な後見が生きていた。また村上天皇自身、穩子という関白忠平の妹が、後見としてひかえていた。

それに反して、為平親王は、はかばかしい後見がほとんど亡くなっていた。高明女と結婚した時点では、ほぼ最悪の状態であった。

(1) 元服の時点で既に母後の安子は没していた。

(2) 伯父達は生きていたが、伊尹は参議であり、その女懷子は東宮憲平親王の妃として既に皇女を出産していた。註四十一

(3) 妃候補には「はかばかしい」後見のいる人物を探したと思われる。

(4) 為平親王にとって心許せる人物、全面的な後援者は父・村上天皇しかいなかった。

村上天皇が安子と結婚した時とは、全く状況が異なっていた。為平親王の伯父伊尹の女・懷子は康保元年（九六四）十月十九日には、東宮妃として皇女宗子の出産を経験していた。伊尹にとっては為平親王の立太子は、それだけ懷子が生

むであろう、皇子の立太子の妨げになるのである。村上天皇はその辺の事は十分に考慮に入れていたのではないか。次期天皇・憲平親王や為平親王達には、母后も死亡していれば、外祖父も死亡しているのである。伯父達も若い。加えて祖父師輔の弟・師尹は生きており、その女・芳子には村上天皇の皇子・永平親王がいたのである。為平親王の元服した前後には権力の空白、混沌しかなかったのではないか。系図IV参照

そこで為平親王を東宮に擁立しようとするれば、余程しっかりした人物を後見にしなければ、大変困ったことになる。村上天皇自身、考えていたのではないか。そこで村上天皇の方から、源高明に為平親王妃をと頼んだのではないだろうか。右大臣源高明は火中の栗を拾われたのである。そこには必死になっている父の顔があるだけである。父帝はたぶん死の床まで、為平親王の立太子を腐心し、願ったのではないだろうか。

『栄花物語』はまったくこの逆のストーリーを展開する。『栄花物語』の作者は為平親王の東宮擁立が失敗した後、父・村上天皇の為平親王に対する愛情は、世間で喧伝する程ではなく、実は薄かったのではないかと記す。『栄花物語』では為平親王の嫁娶までは順調に進展する。右大臣師輔も中宮安子も生きていたのであるから。この時点までは誰れも為平親王の次期東宮擁立を疑わなかった。為平親王立太子への困難は、まず、外祖父師輔の死で持ち上った。父帝・村上天皇はこの時、為平親王の東宮擁立を支えるのではなく、断念する方に少し傾いたと記すのである。中宮安子の死後も同じ様な展開を示す。父は安子の死後、為平親王の東宮擁立をあきらめ、弟の守平親王に決定するよう、小野宮実頼に伝えたと言及するのである。

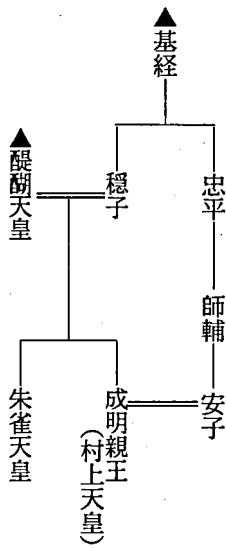
そこには村上天皇を貶しめてまで、九条流の師輔や安子に対する配慮が働いているのである。師輔や安子、そして九条流の人々は暗に為平親王の立太子を切望したのである。このことは、『栄花物語』の作者が是非とも強調しなかった点でもあった。師輔や安子は人々の期待を裏切らない。だがそれを阻止したのが村上天皇であり、高明のとんでもない

〔系図Ⅳ〕

▲印は既に死亡している人物

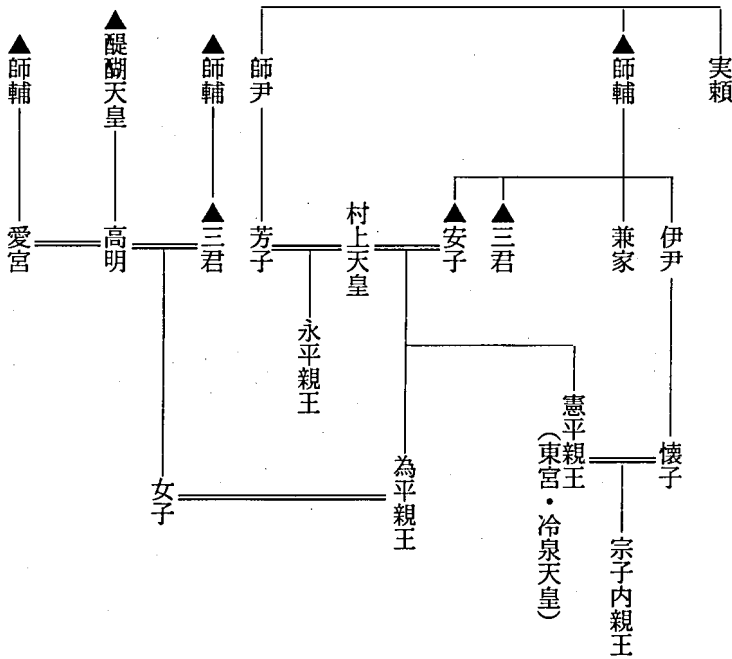
成明親王の結婚から立太子の間の生存者

〔天慶三年(九四〇)～天慶七年(九四四)の間の生存者〕



為平親王の結婚時の生存者

〔康保三年(九六六)の生存者〕



思い違いの考えから発した陰謀により、わずかに残された一縷の望みも断たれたのである。『栄花物語』の作者は、読者にその様に訴えかけているのである。

『栄花物語』に記された、為平親王関係叙述の改変された歴史展開の中から読み取れるのは、藤原師輔と安子に対する作者の熱烈な讃美である。そこに表れる師輔や安子は、無謬の人物でなければならない。その為にはたとえ帝であろうとも傷をつけても、犠牲にしてもよかったのである。師輔や安子が無謬であるという、信仰にも似た気持ちがあったのである。それは九条流の本流となっていた道長の無謬へとも通じるのではないか。作者はその様な効果をねらったと言えるのではないか。

註一 『平安朝文学の史的研究』（吉川弘文館・昭和四十九年）の第三章 第三節の「一 安和の変」に詳しい。

註二 『王朝歌壇の研究——村上冷泉四融朝篇——』（桜楓社・昭和四十二年）の前篇第七章「源高明論」のI・IIに詳しい。

註三 『日本紀略』寛弘七年十月十日の条に「年五十九」とある。「権記」の同日の条にも同様な記録がされており、それより逆算して算出。

註四 『日本紀略』同日条。

註五 『日本紀略』、「権記」同日条。「小右記目録」第二十。

註六 『栄花物語全注釈』の(一)～(四)（角川書店・昭和四十四年～五十三年）の中で分けているものに従った。これは、日本古典文学大系本の頭注に記された「標目」とほぼ同じである。

註七 『日本紀略』冷泉院踐祚前抄記による。

註八 『一代要記』による。

註九 『尊卑分脈』、「大鏡」第三卷「左大臣師輔」伝による。

註十

『日本紀略』延長元年（九三三）三月二十一日条に「依皇太子臥病。大赦天下。子刻。皇太子保明親王薨。年廿。天下庶人莫不悲泣。其聲如雷。舉世云。昔師靈魂宿於所爲也。」と、二十一歳の若さで病没した保明親王の死因を、菅公の祟りであると恐れた様子が描かれている。

註十一

『日本紀略』延長三年（九二五）六月十九日の条に「寅刻。皇太子慶頼王薨于職曹司。」とあり、わずか三年ばかりの間に皇太子が引き続き二人も亡くなっている。

註十二

この頃の安子の住んでいた殿舎は飛香舎であった。『日本紀略』天徳三年（九五九）六月十六日条に「今夜。中宮安子一條第入御藤壺。」とあり、天徳四年（九六〇）五月十日の条には「中宮安子從飛香舎移右近權中將伊尹朝臣一條宅。」とある。これより推測できるのは、為平親王には飛香舎・藤壺が、ごく親しい場所であったと考えられる。『栄花物語』の記す如く、両親が手離難く、母と共に住んでいた可能性も無くはない。日向一雅氏は「内裏・後宮／飛香舎（藤壺）」（平安貴族の環境）『至文堂・平成三年』の中で、「飛香舎が皇后の御所となるのは村上天皇の中宮安子以来であるようだ」と述べている。

註十三

『日本紀略』同年同日条。

註十四

『日本紀略』同日の条に「皇太子參覲。第四爲平親王拜覲。勅賜劔。」とあり、ほぼ皇太子の兄に引けを取らない位の帝の寵愛の深さが読み取れよう。

註十五

『日本紀略』康保元年（九六四）四月廿四日の条に「中宮産皇女選子。」続いて四月二十九日の条に「中宮安子崩于主殿寮年卅八。皇太子母也。。」とあり、選子内親王出産後の、産後の肥立ちが悪かったのであろう。一週間もしない間に、安子が死んでしまった。

註十六

時野谷滋氏「律令封祿制度史の研究」（吉川弘文館・昭和五十二年）「第二編 第四章 第三節」による。

註十七

『日本紀略』応和三年（九六三）二月二十八日の条に「於紫宸殿有皇太子元服。」十四。天皇御南殿。左大臣眞頼加冠。參議朝忠理髮。冠禮了。有詔書。」と、加冠が実頼、理髮が朝忠であると記す。

註 十八 「日本紀略」天祿三年(九七二)正月三日条。

註 十九 「尊卑分脈」第三篇「醍醐源氏」。

註 二十 「村上天皇御記」康保二年(九六五)十一月十九日の条に「爲平親王」とあり、同三年(九六六)正月一日の条に「上野太守親王」(爲平)

野太守親王」(撰集秘記)とある。これ等によれば、康保二年の十一月二十日から同年十二月末日までの間に、爲平親王は上野太守に任ぜられてものと思われる。

王は上野太守に任ぜられてものと思われる。

註 二十一 「日本紀略」同日条。

註 二十二 「日本紀略」同日条。

註 二十三 伊藤一男氏「貴族の通過儀礼——三、結婚——」(平安時代の儀礼と歳事)至文堂・平成三年)。あるいは、中村義雄氏「婚姻」(王朝の風俗と文学)塙選書・昭和三十七年)。村松博司氏「栄花物語全注釈」(一) (二五)節 補説等を参照。

照。

註 二十四 安子が「梨壺女御」と「日本紀略」に記されるのは、天曆二年(九四八)四月十一日の記事が最後である。その後、天曆三年(九四九)三月二十二日の記事以降は立后して「中宮」と記されるようになるまで、「藤壺女御」と記される。

曆三年(九四九)三月二十二日の記事以降は立后して「中宮」と記されるようになるまで、「藤壺女御」と記される。

註 二十五 「公卿補任」によれば、天徳四年(九六〇)誕生の源俊賢の母は、三君である。爲平親王の北方は「小右記目録」によれば長元三年(一〇三〇)に八十歳で没しており、逆算すれば天曆五年(九五二)誕生となる。

れば長元三年(一〇三〇)に八十歳で没しており、逆算すれば天曆五年(九五二)誕生となる。

註 二十六 「公卿補任」天徳二年(九五八)「源高明」条。

註 二十七 「公卿補任」康保三年(九六六)条。藤原氏が十六名中八名。源氏を含む他氏が八名。藤原氏八名中、朝忠と朝成は醍醐天皇の母・藤原胤子の一族である。

醍醐天皇の母・藤原胤子の一族である。

註 二十八 「日本紀略」同日条に「女御懷子産第一皇子。花山院是也。」とある。

註 二十九 「日本紀略」長徳四年(九九八)九月是月の記事に「無位婉子女王卒。年廿七。華山院女御。爲平親王女。」とあり、逆算。「小右記」によれば亡くなったのは七月十三日のことである。

れば亡くなったのは七月十三日のことである。

註 三十 【尊卑分脈】第三篇「陽成源氏」元長親王条。元長親王は「日本紀略」によれば、康保四年（九六七）六月十六日の記

事に「式部卿元長親王」と記され、帯劔を聽されている。その後七十六歳で薨去するまでその職にあったと思われる。

註 三十一 【日本紀略】同日条。

註 三十二 【日本紀略】同日条に「卜定伊勢齋王。式部卿爲平親王女恭子女王^三。卜食。但賀茂齋院不改。」とある。齋院は

爲平親王の同母妹・選子内親王が、円融天皇の天延三年（九七五）に卜定されてから動いていない。この齋宮と齋院の選定は、村上天皇の血統の中でも、中宮安子所生の人々を至尊としたからに他ならない。

註 三十三 【公卿補任】長徳二年（九九六）から寛仁元年（一〇一七）「源憲定」条。

註 三十四 【尊卑分脈】第三篇「村上源氏」「敦定」条。

註 三十五 【日本紀略】同日条に「入道左兵衛督頼定薨。年四十四。」とあり、誕生年はそれよりの逆算。

註 三十六 【公卿補任】寛弘六年（一〇〇九）から寛仁四年（一〇二〇）「源頼定」条。

註 三十七 【栄花物語全注釈】（一）七六頁（二五）節 **補説**「よめ扱ひ」。

註 三十八 【日本紀略】同日条、円融天皇「即位前紀」等による。

註 三十九 【大鏡裏書】第一卷29「太皇太后宮孺子御事」によれば「天曆八年（九五四）正月四日崩于昭陽舍^{年七十}」とある。

註 四十 【公卿補任】天慶三年（九四〇）「藤忠平」・「藤師輔」条。忠平は従一位関白太政大臣、師輔は従三位権中納言であつ

た。天慶七年（九四四）の立太子の時点では、忠平は従一位関白太政大臣であり、師輔は従三位大納言となっていた。

註 四十一 【日本紀略】康保元年（九六四）十月十九日条に「皇太子更衣於^{孺子}二條^{孺子}第二有^{孺子}産事。女子。」とある。